

亡命キューバ人作家、カブレラ・インファンテについての本出版される

亡命キューバ人作家、ギジェルモ・カブレラ・インファンテ(1929-2005)についての評論が、キューバで出版されました。ハバナ大学を出たばかりのエリザベス・ミラバルとカルロス・ベラスコによる『報道記者の歩みについて—1965年までのキューバにおけるギジェルモ・カブレラ・インファンテの知的作業』で、キューバ作家・芸術家同盟(UNEAC)出版より、刊行されました。これは、2009年にUNEACのエッセイ賞を受賞した作品です。なお、UNEACは、現在9,000人余の会員を擁する会です。

カブレラ・インファンテは、1965年にベルギーに亡命し、その後ロンドンで執筆活動を行います。国際的にも高く評価されている小説家、評論家で、1997年にはスペイン語圏で最高の文学賞、セルバンテス賞を受賞しています。日本でもキューバ文学の愛好者の中では、よく読まれている作家です。



しかし、キューバでは、65年に亡命したことから、その後、代表作のひとつ『三頭の悲しき虎』などの作品は出版されず、無視された時期が続きました。

そうした状態を、先日紹介した、キューバ人作家、レオナルド・パドゥーラは、次のように語っています。

「(キューバで発行された)キューバ文学辞典にカブレラ・インファンテが載っていない時期がありました。編纂者の見解では彼はキューバ作家ではないということなのでしょう。でも、少なくとも僕たちの世代はそういう無意味な見方を乗り越えていると思います。国外に住んでいてもスペイン語でキューバのことを書いていけばキューバ人作家ですし、キューバを外から見る視点というのは大事です」「インタビュー、レオナルド・パドゥーラ、聞き手野谷文昭」『雑誌すばる』2004年11月号)。

キューバで最近編集されるようになったネット電子辞書のエクレドでは、「反バチスタ専制政治運動の活動家。小説家、批評家、エッセイシスト、新聞記者、映画脚本家であり、60年代後半のキューバ文学の無視できない人物の一人」と紹介しています。『グランマ』紙でも本年2月には、「キューバ文学は、ラテンアメリカに大きな影響を与えている」として、その代表的な作家として、「ニコラス・ギジェン(1927-1989)、ホセ・レサマ・リマ(1910-1976)、アレホ・カルペンティエール(1904-1980)、ギジェルモ・カブレラ・インファンテ、ビルヒリオ・ピネーラ(1912-1979)、ドゥルセ・マリア・ロイナス(1902-1997)」の名前を上げています。

しかし、それほどの作家がなぜ亡命し、なぜキューバで無視されるようになったかは、キ

キューバのメディア・文学界では、明らかにされていません。たとえば、フランシスコ・ロペス・セグレラの『キューバ文化・社会史』(1989年)は、キューバで発行されたこの部門における90年代までの代表的な著作ですが、そこでは、「著者は、『平和のときも戦いのときも』において、独創性を企図しているが、海外のモデルの模倣であることはあまりに明白であり、『三頭の悲しき虎』に至っては、人間の基本的な問題の起源が欠如している」と酷評されています。

実は、この背景には、キューバ政府の文化政策の基本となる大転換があったのです。映画好きのカブレラ・インファンテは、1959年に創立されたキューバ映画芸術・産業庁(ICAIC)の理事を務めていました。ルイス・ブニュエルがキューバで映画を撮る計画が出た際、カブレラ・インファンテは賛成でしたが、一部の理事が、ブニュエルはブルジョワ思想の持ち主として強硬に主張し、企画が許可されないことがありました。それに抗議してカブレラ・インファンテは、ICAICの理事を辞任しました。さらに、彼の弟が友人とドキュメンタリー『P.M.(午後)』を制作しましたが、ICAICが「反革命的」という理由で反対し、上映されませんでした。そこでカブレラ・インファンテたち、知識人、芸術家、文学者など200名が抗議の署名を発表しました。そのためフィデルは、国立図書館に知識人達を一連の対話集会をもち、そこで、次のような有名な言葉を述べます。

「このことは、はっきりしていると思う。革命的作家と芸術家の権利、革命的でない作家と芸術家の権利はどうようなものかということである。革命の中ではすべての権利があり、革命に反対すれば、何の権利もない。これは、作家や芸術家に対してのみに例外的に適用される法律ではない。これは、すべての市民の一般的な原則である。革命の基本原則である。反革命たちは、つまり革命の敵どもは、革命に反対する権利は何もない。というのは、革命はひとつの権利をもっているからである。それは、存在する権利、発展する権利、勝利する権利であり、だれが、国民のこの権利を疑うことができるであろうか。国民は、『祖国か死か』つまり、革命か死かと述べたのである。」(フィデル・カストロ、「知識人へのことば」1961年6月30日)。



その後のキューバの文化・芸術政策は、このフィデルの発言にそって進められます。このフィデルの発言が行われた当時の歴史的状況を見てみますと、61年4月16日、革命が社会主義的性格をもっていることが宣言され、翌日17日ケネディ政権に支援された傭兵軍1511名がキューバに上陸作戦を展開、それを3日間で撃退、という民族主権擁護の意識が高揚していた時期でした。また、キューバ人特有の「オール・オア・ナッシング」の誇張

した表現もあるように思われます。

当時の対話に参加した詩人のロベルト・フェルナンデス・レタマール(1930-)は、「革命家が、革命の否定的側面を批判しても、反革命ではない。・・・ひとたび革命権力が樹立されると、革命的知識人にとって、多くの創造的課題に参加することはもはや権利ではなく、革命において否定的と考える問題を指摘することは、革命を強化するための義務である」と述べています。

しかし、カブレラ・インファンテは、「フィデル個人の考えで革命の範囲が判断されることになる」として、この考えに納得しなかったといいます。実際、米国の露骨な干渉から祖国を擁護するために、国民の多くは当時の革命の政治・経済政策を支持していましたが、未来の芸術の創造活動となると、フィデルの発言は、いろいろ議論を招く内容でした。問題は、キューバに留まり、米国の支援も受けず、さりとて革命政策に賛成しない人びとの表現の権利に関わってくるからでした。

この後、カブレラ・インファンテが編集に携わっていた雑誌「革命の月曜日」が廃刊となり、経済的に窮地に陥りました。しかし、1962年突然ベルギー大使館の文化担当官に任命され、ベルギーに赴きます。1965年母親の葬儀に帰国した後、ベルギーに戻り、外交官の職を辞し、亡命を選びました。彼は、1979年、ロンドンで傑作、『亡き王子のためのハーバナー』を刊行します。

一方キューバでは、1965年から3年間、同性愛作家・芸術家、若い犯罪者など2万5000人が、矯正のために生産支援軍事部隊（UMAP）に送られました。しかし、UNEACの抗議と海外からの圧力により、この制度は68年廃止されました。当時、キューバは、1970年の砂糖1000万トン生産を目標に掲げ、国民がこの目標に総動員されて、生産活動においても精神主義が重視され、社会全体に緊張が高まっていた時代でした。



1968年にはエベルト・パディージャ問題が起きました。同年のUNEACの詩部門にて、詩人のエベルト・パディージャ(1932-2000)が受賞しましたが、「思想的に革命と相反する」というUNEAC理事会の注釈つきで刊行されました。この時から、カブレラ・インファンテは、ロンドンでキューバ革命批判を公然と開始し、亡くなるまで厳しい批判を続けます。その後、1971年3月パディージャは、「反政府反乱活動」の疑いで逮捕、37日間拘留されます。しかし、サルトル、コルタサル、ガルシア・マルケス、モラビアなどの国際的

に著名な知識人の要請により釈放され、パディージャは自己批判を行いました。その後パディージャはキューバに留まるも、最終的には、1981年米国に亡命しました。

この頃のキューバの文学界の状況を前述のパドゥーラは、こう見事に表現しています。

「77年か78年ぐらいになって初めて、エベルト・パディージャやアントン・アルファト、レサマ・リマ、ビルヒリオ・ピネーラらに何が起きたのかいくらか分かり出すのです。彼らは国内にいるのに姿を見せず、誰からも相手にされず、しかもどんな罪を犯したのかもはっきりしない。巨匠と呼べるレサマ・リマとピネーラが亡くなったときも、新聞には亡くなったと書かれた小さな記事が載っただけです。つまり、既に社会的に抹殺されていたのです」(パドゥーラ、前掲インタビュー)。

これらの人びとが再び脚光を浴びるのは、90年代以降のことです。キューバの文化・芸術政策における「灰色の時代」でした。

現在、キューバでは、国立性教育センター所長のマリエラ・カストロさん(ラウル議長の娘さん)を中心に、UMAP問題の再調査が進められています。

マリエラさんは言います。

「どの政府も、どの指導者も、どの革命の過程も、完全なものはありません。歴史を正直に、透明に調査してその結果から誤りを真摯に学ぶべきです」。



今回の、カブレラ・インファンテについての評論の出版も、こうした大きな時代の流れに沿ったものです。この本の著者は、「普通の作家が不在ということではない。キューバの重要な作家が不在なのだ。カブレラ・インファンテという論争的人物についてのいろいろな人びとの意見を取り上げ、真摯に紹介した本である」と述べています。キューバは、いろいろな分野で、少しずつ、少しずつ、変わってきているようです。

(2011年8月13日 新藤通弘)